

僧侶さまの恋わずらい

Kano & Sousyun

加地アヤメ

Ayame Kaji

eternity



エタニティ文庫

目次

僧侶さまの恋わずらい

5

花乃の甘い新婚生活

293

書き下ろし番外編

五年経っても

341

僧侶さまの恋わずらい

一 花乃かの、出会う

「え、いつものお坊さんじゃないの?」

「それがねえ、加藤かとうさんぎっくり腰こしやつちやったらしくて。今年はお弟子でしさんが来るそうよ」

お盆おぼんが始まった、ある夏の暑い日。

精霊棚しょうりょうだなに飾る茄子なすの牛とキュウリの馬を作っていた私に母が告げた。

現在我が家は、毎年恒例たねいれいとなつている棚経たなきょうの準備の真つ最中である。棚経たなきょうとは、お盆の時期にお坊さんが一軒一軒檀家だんかを訪問してお経おきやうをあげることに。

現代の住宅事情では仏壇が無かつたり精霊棚しょうりょうだなを作らないお宅も増えてきた。だが、仏教徒で祖父母の代から一軒家に住む我が家では、毎年この時期になると仏壇の前まへに小さなテーブルを置き、そこに真菰まこものゴザを敷いてお供え物ともえものと位牌いはいを並べた精霊棚しょうりょうだなを作る。こうして先祖の霊たまごをお迎えする準備をするのだ。

うちにはいつも、菩提寺ぼだいじの住職である年配のお坊さんが来てくれていたのだけれど、

ぎっくり腰では仕方がない。

「なんだ……これから加藤さんの好きな水羊羹みずようかんを買いに行こうと思つたのに。じゃあ何買つてきたらいいんだろう?」

「代わりに来るのお弟子でしさんみただし、何でも食べてくれるわよ」

私は茄子なすとキュウリの牛馬を母に渡し、よいしょと立ち上がる。

「お弟子でしさんつて、若いの?」

「六十代後半の加藤さんよりは若いんじゃないの?」

「まあ、そうよね……」

仏壇を掃除しながら、母が「ほら、早く買いに行け」とばかりにしつしつと手を振る。「もう。分かつたわよ、行ってくる」

お坊さんが来る時間まであと三時間ほど。私は鞆かぼんと日傘を持って、足早に家を出た。到着した百貨店は、最近始まった夏物セールで随分と賑わつていた。時間があればゆつくり見たいところだけど、残念ながら今日はそういった余裕はない。

後ろ髪を引かれつつ、混み合うデパート地下のお菓子売り場へ向かつた。

お盆時期ということもあり、お菓子の種類は充実している。

加藤さんは毎年いらっしゃるから、どんなものが好きか何となく分かる。でも、年齢すら分からないお弟子でしさんの好みとなると、さっぱりだ。

いろいろと悩んだ末、私は小ぶりの葛饅頭くずまんじゅうと水羊羹みずようかんを買った。
 葛饅頭は見た目も涼しげだし、喉越しもいから食べやすいだろう。
 棚経たなきょうに来てくれるお坊さんは、たくさんの檀家だんかさんのお宅で何かしらご馳走になって
 いる。だから、お茶菓子の量は控えめで、お腹が冷えすぎないものがいらしい。

なんせお坊さんは出されたものを残せないからね。

水羊羹のほうは、ぎっくり腰の加藤さんへのお見舞いだ。

百貨店からの帰り道、日傘をさして住宅街を歩いていると、原付に乗ったお坊さんが
 私の横を通り過ぎた。

「ほんと、この時期は忙しそうね……」

お盆とはいえ、父も弟も仕事が忙しく休みが取れなかった。そのため今日は、シフト
 制で比較的融通ゆうつうの利きやすい私が仕事を休み、母を手伝うことにした。必ずしも棚経たなきょうに
 二人以上いなきやいけない決まりがあるわけじゃないんだけど、母が「せっかく来てく
 れるのに私一人でお経聞くのも寂しいじゃない！」と言うもんだから。

葛原花乃くずはな。二十九歳独身、彼氏なし実家暮らし。これといって没頭している趣味もな
 ければ特技もない。隣町にある洋食店で働きながら平凡な毎日を過ごしている。

同い年の友達がどんどん結婚して出産していく中、未だ独り身で若干肩身の狭い私は
 こんな時くらい家族に協力しなくては。とはいえ、特に結婚を焦っているわけではない。

仕事をしながら平穩に自分のペースで生きていければいいと思っていた。

この時まで。

家に戻ってきた私は、仏間の掃除に追われる。

そんなにも凄く綺麗にする必要はないんだけど、やっぱり仏間に身内以外の人が入
 る機会ってなかなかないから、これを機にと思っせと掃除をした。

「花乃。お坊さんもうすぐいらいっしやるから。名前は確か……支倉しぐらさん。インターホン
 鳴ったら出てよ？」

「はいはい」

すでにお坊さんを迎える用意はできている。

精霊棚しょうりょうだなの準備も終えたし、仏間は掃除をした後エアコンをつけて涼しくしてある。
 おしぼりは冷蔵庫で冷やしてるし、お茶菓子も支度済みだ。あとは支倉さんとやらが来
 るのを待つばかり。

しかし、予定の時刻が過ぎててもインターホンの鳴る気配はない。おやつと思っている
 と、我が家の固定電話が鳴った。

「はいはい」

母が電話に出ると、相手は例のお坊さんのようだ。どうやら、迷ってしまったらしく

家の場所を確認する電話だった。

ざっくりと説明し受話器を置いた母は、私のほうへくると振り返る。

「花乃、外に出て支倉さん案内してあげて。近くまで来てみるみたいだから」

「はい……」

家の前に出て、キョロキョロと周りを見渡す。だが、近くにそれらしき人は見当たらない。

——もしかして、一本、通りを間違えたのかな。

そう思った私は、少し広い通りまでサンダル履きのまま出てみることにした。ちよつと近道して、細い路地から角を曲がろうとした瞬間、目の前をスツと影がよぎる。

「わっ!!」

「おっと」

出会い頭に人とぶつかりそうになり、咄嗟に避けようとしてバランスを崩してしまった。そんな私の腰を、相手の男性が片手で支えてくれる。

「ごっ、ごめんなさいっ!」

「申し訳ありません、大丈夫ですか」

その声に、私の背中がゾクリと粟立つ。

低くて、少し甘い優しい声——

私の目の前には、下の白衣が透けて見える黒紗の法衣と、茶色の輪袈裟を身につけた男性の広い胸がある。はっとして顔を上げると、すっきりとした短髪に、やけに綺麗な顔をした僧侶が私を見下ろしていた。

「……は、支倉……さん、ですか?」

「はい、支倉です。あ、もしかして葛原さんでしょうか?」

「そうです」

私が答えると、その人はほっとしたように表情を綻ばせた。

「よかった。一本、道を間違えてしまったようですね。では、これからお伺いします」

そう言って微笑んだ支倉さんに間近から見つめられて、私の心臓がおかしな音を立てる。

「お、お願いします。ところで……あの、腰に手が……」

もう危険は回避したはずなのに、何故だか支倉さんの手は私の腰を支え続けている。

「ああ、これは失礼いたしました」

全然そう思っていないさそうな笑みを浮かべて、静かに彼の手が離れていった。だけど、彼自身は私のすぐ側に立ったままだ。

なんだろう、この人。悪気はないのだろうけど……やけに距離が近い気がする。

動揺して立ち尽くす私に、微笑んだ支倉さんが声をかけてきた。

「葛原さん？ 参りましょう」

「は、はい。こちらです……」

……きつと気のせいね。支倉さんがあんまりにも綺麗な顔をしてるから、びっくりして動揺したんだ。しつかりしろ、私。

家に着くと、支倉さんは出迎えた母に丁寧な挨拶をする。たちまち目をキラキラさせた母が、支倉さんを仏間に案内していった。私もその後が続く。

支倉さんは持っていた黒い鞆を開き、中から鈴と木魚のようなものを取り出す。そして精霊棚の前に正座をすると、私達が座るのを待って静かに読経を始めた。

しかしさっきのアレは、なんだったんだろう。

柄にもなく初対面の男性にドキドキしてしまった。しかも相手はお坊さんだというのに……

綺麗な顔立ちのせい？ それとも間近で見つめられたから？ もしかして、腰を触られたせい？

ありがたい読経の最中だというのに、私の頭の中は煩惱でいっぱいだ。

しかし、良い声だなあ……

いつも来てくれる加藤さんも、落ち着いた素敵な声をしている。でも、支倉さんの声はうっとりするほど綺麗な低音で、凄く艶があった。

まるで心地いい音楽を聞いているような気持ちになって思わず聞き惚れてしまう。

どれくらい時間が経ったのか。リーンと高い鈴の音が聞こえて、我に返る。

気づくと読経は終わっていて、振り返った支倉さんが頭を下げた。

「ありがとうございます」

その声にハツとして、私は急いで立ち上がる。

キッチンに行き、お茶の準備をする。その間、心得たように母が支倉さんの話し相手となってくれていた。それにしても、母の声はやけに華やいている。

——お母さん、支倉さんがイケメンだから嬉しそうだな……

そんなことを考えながら手早くお盆に煎れ立てのお茶とお茶菓子、冷たいおしぼりをのせて仏間に戻った。そこにはすでに小さなちゃぶ台が用意されていて、上機嫌な母の聲が響いている。

「まあ、じゃあ将来は実家のお寺を継がれるんですか？」

「そうですね。たぶんそうなると思います」

私が支倉さんの前にお茶を置くと、にっこりと会釈された。

つられて私も笑顔で会釈する。

「支倉さんて、今おいくつ？」

唐突な母の質問に、支倉さんは穏やかに三十一ですと答える。

「じゃあもうご結婚はされているのかしら」

「いえ、独身です。なかなかご縁が無くして」

少しはにかみながら、彼は葛饅頭くずまんじゅうに竹楊枝たけやうじを刺して少しずつ口に運んだ。そんな支倉さんの手に、私はつい目がいつてしまう。

綺麗な手だな……。指が長くて、ちよつと骨ばつてて。なにより所作が美しい。気づくと、彼の手の動きをじつと目で追っていた。

「あら、じゃあうちの娘なんてどう？ 二十九で彼氏もいないし。顔立ちだつて悪くないのに、ちつともご縁が無くてねえ……。そろそろお見合いでもと思っていたのよ」

思いがけない母の言葉に、カアーツと顔が熱くなる。私は、隣にいる母を睨みつけた。「ちよつとお母さん!! 何、いきなり。そういうことはご迷惑だから、やめてよ!」

私が割り込むと支倉さんは、「いえ、そんなことは決して」と言つて優しく微笑んだ。ここでタイミングよく、家の電話が鳴る。これ幸いと私が立ち上がろうとすると、何故か母に止められた。

「私宛かも! ちよつとごめんなさい! 花乃、お相手してて」

勢いよく立ち上がった母は、少し慌てぎみに仏間から出て行つてしまう。

私は母が出て行つた襖かぶすまを見つめたまま、しばし茫然ぼうぜんとした。

——ええー、ちよつと、このタイミングで二人きりにしないでよ。……どうしよう、

一体何を話せばいいわけ……

「花乃さん、と仰るのですか」

困惑して言葉が出てこない私に、支倉さんが静かに声をかけてきた。

「あ、はい」

「どのような漢字ですか？」

「植物の花に、乃……つて分かりますか、こう……」

指でちやぶ台に乃の字を書くと、支倉さんは理解した様子で「ああ」と頷いた。

「素敵なお名前ですね。貴女にぴったりだ」

「あ、ありがとうございます……」

きつと気を使つてくれているのだろう。ちよつと申し訳なく思いながら会釈えしやくをした。

「先ほどの話ですが」

「はい?」

先ほどの話つてなんだ?

支倉さんが優しい笑みを浮かべながら私を見つめる。

「お付き合いをされている方は、本当にいらつしやらないのですか?」

そこ、突っ込んでききますか。

「……ええ、まあ」

「世の中の男は見る目がありませんね。こんなにお綺麗なのに」

「……………」
あまりにストレートな褒め言葉に思わず固まる私。

この人、よくこんな恥ずかしいこと面と向かつて言えるな。こっちが照れるんだけど……………」

「き、綺麗かどうかはさておき、なかなかご縁が無くて。それに、こういうことは自然に任せようと思っています」

話している間、支倉さんはずっと私から視線を逸らさなかった。

そんなにじっと見られると、落ち着かないのですが。なんか……………今すぐ洗面所の鏡で自分の姿を確認したくなってくる。

……………大丈夫かしら。私、どっか変なところもある……………?

「そうでしたか、ならばこれもご縁でしょうか」

私をじっと見つめていた彼が、そう言って笑みを深めた。

「え？ 何がですか？」

支倉さんが何を言いたいのがよく分からず、彼の顔を凝視する。彼も何故か私の顔をじっと見つめた。

その時、電話を終えた母が、パタパタと小走りで仏間に戻って来る。

「途中でごめんなさいねえ。娘、ちゃんとお相手してました？」

「はい。楽しくお話しさせていただきました」

支倉さんが母にっこりと笑みを向けた。

どこが楽しく？

疑問に思いながら、黙って母と支倉さんの会話を聞いていると、ふと支倉さんが腕時計に目をやった。

「ああ、楽しくてつい喋りすぎてしまいました。次に行かねばなりませんので、これにてお暇いたします」

そう言うのと深く頭を下げ、支倉さんは立ち上がる。

玄関に向かう支倉さんの後を母がついていく。その後ろ姿を見送っていたら、ふと加藤さんへのお見舞いを渡すのを忘れていたことに気づいた。急いでキッチンに戻り紙袋を掴むと、私は小走りで玄関に向かった。

「あ、すみません、これ……………」

支倉さんに紙袋を渡そうとしたら、横から母の声が飛んできた。

「花乃、支倉さんお車でいらっしやってるそうだから、そこまでお見送りしてあげて！」

「……………はい」

こういう時、母の命令は絶対だ。私は紙袋を持ったまま家を出て、彼が車を停めてい

る近所のコインパーキングまで、支倉さんと並んで歩く。

「車でいらしてたんですね……」

「さすがに徒歩で全てのお宅を回るのでは、時間がかかってしまいますからね。バイクの日もありますけど、今日はお伺いするお宅の範囲が広がったので車にしました」

私の何気ない眩くらきにも、いい声で、丁寧な答えが返ってきた。

「今の時期はやっぱりお忙しいんですね？」

「そうですね、かなり……。特に今年は住職が回れないこともあり、いつも以上の忙しさですね」

「そうなんですか……大変ですね……」

毎年加藤さんも忙しそうだったけど、今年はその加藤さんが動けないんだから余計に大変だよな。

「花乃さんは普段どういったお仕事をされているんですか？」

今度は逆に質問された。

「隣の、老舗らひせの洋食店で働いています」

「なんとというお店ですか？」

間髪かんはつを容れず、支倉さんが聞き返してくる。

「菓亭くわていっていう店ですけど……」

「ああ、聞いたことがあります。あの辺りにも檀家だんかさんがいて、その店のオムライスが美味しいと仰おぼっていました」

「あ……ありがとうございます。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください」

「はい、ぜひ」

当たり障りのない会話をしながら歩いていたら、コインパーキングが見えてきた。支倉さんが鍵を取り出すと、ハイブリッドのセダンがピビ、と音を発する。

これでようやくお役御免だとばかりに、私は持っていた紙袋を支倉さんに差し出した。「これ、加藤さんのお好きな水羊羹みずようかんです。よかつたら皆さんで召し上がってください」

支倉さんの視線が、紙袋ではなく私に注そそがれる。彼は紙袋を差し出した私の手を、大きな手で包み込んだ。その行動の意味が分からなくて、私は一瞬間の中が真っ白になる。

「へっ？ あ……」

「花乃さん」

彼の声のトーンが少し低くなったような気がする。見上げると、支倉さんが射抜くような眼差しを向けてきた。

「貴女ささえよければ、本気で考えていただきたい」

「え、何を……」

「私の妻になることを」

思いがけない突然の言葉に、私の思考が停止した。

………つま??

「……は、支倉さん、いきなり何を仰おしってるんですか？」

まるで状況が理解できない私は、なんとか平静を装よおい支倉さんから視線を逸そらした。しかし、包まれた手を通して伝わってくる支倉さんの熱に、変な汗が出てくる。

「ここで出会ったのも何かのご縁。私はこの出会いが意味の無いものとは思えない」支倉さんが、じり、と私との距離を詰めてきた。

「すぐにどうこうとは言いません。ただ、私との未来を考えてみていただけませんか」「そ、そんなこと急に言われても困ります！ 大体、今日お会いしたばかりの方と、いきなり結婚なんて無理です！」

私の言葉に少し冷静さを取り戻したのか、支倉さんがふっ、と笑った。

「……そうですね。貴女が仰おほる通り、いきなり過ぎました」

そう言いながら彼は一歩後ろに退ひいた。私の手から掌あひらを離し、代わりに紙袋の持ち手を掴つかむ。

「すみません、驚かせてしまつて。でも——」

紙袋を受け取る間際、彼の長い指が私の手の甲を、つ、と撫なでた。

予期せぬ接触到、私の胸がドキンと跳ねる。

「先ほどの言葉に嘘はありません。お土産みやげをありがとうございます。では、また」

きつぱりとそう言い放はなつた彼の表情は、なんだかとても嬉うれ々としたものに見えた。大袈裟げさかもしれないけど、まるで宣戦布告せんせんぷくされているような気になる。

茫然ぼうぜんと突つ立つたままの私をその場に残し、支倉さんの乗った車がコインパーキングから出ていく。私の横を通り過ぎる時、それはそれは綺麗な笑みを残して。

……いまのは、なに？

二 花乃、逃げる

「葛原さん、どうした？」

店長に声をかけられた私は、ハツとなって我に返る。

いけない、仕事中だった……！

老舗らいせの洋食店、董亭のランチタイム。いつもなら誰より忙いそぎ回まわっている時間帯だというのに、私は空を見つめたままぼーっとしていたようだ。

「すみません、何でもないです」

慌あわてる私を不思議そうに見ながら、店長は出来上がったオムライスをカウンターに置

いた。

「珍しいねえ……葛原さんがぼーっとするなんて。何かあった？」

「い、いいえ！ 何もないですよっ!? 行ってきます」

オムライスの皿を手に取り、私は笑顔を取り繕ってカウンターを離れた。

すみません店長。何もないどころか、大ありです！

そう、あれは一週間前の出来事。

なんと、会ったばかりの人に、いきなりプロポーズされたんです。あんなの、動揺しないほうがいいでしょう。しかも相手は美形のお坊さん……

もう、一体何に突っ込んでいいやら分からない。支倉さんと別れた後、魂が抜けたみたいに何も頭に入らず、そのまま一日を終えた。

それから数日は何事もなかったけれど、頭が冷静になってくると、徐々に疑問が浮かんでくる。

支倉さんは結婚に縁が無いと言っていたけれど、あれだけ格好よかつたら、絶対に周りが放っておかない。きっとたくさんの縁談が来ているはずだ。

それなのに何故、会ったばかりの私にプロポーズ？ それこそ、意味が分からない。まるで狐にでも化かされた気分だ。

とはいえ、お盆が終わればお坊さんに会う機会など滅多にないし、会わなければ支倉

さんだって私のことなど忘れるでしょう！

なーんて思っていた私に、今日母が、衝撃の事実を告げた。

『あ、花乃。来月お祖母ちゃんの三回忌だからね。お盆の時にちゃんとお盆さんにお願いしておいたから。加藤さんの腰もその頃はおそらく大丈夫だろうけど、自分もお手伝いしますって言ってくれたわ』

その話を聞いた瞬間、ガツン、と頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

別れ際に、支倉さんが口にした言葉を思い出す。

——では、また、つて……そういうことだったのか……！

一体どんな顔をして会えばいいのか考ええると、私は途端に滅入ってくる。

ついで、ため息をついてしまうと、店長が心配そうな顔で近づいてきた。

「本当に大丈夫かい？ 具合が悪かつたら奥で休んでれば？」

店長は五十代半ばの温厚な人だ。先代が始めたこの店の味を二十年近く守り続けている。

そんな店長と私は、学生時代のアルバイト以来、そろそろ十年の付き合いになる。

「だっ大丈夫ですよ！ 先日ちよっといろいろあって、疲れただけなんで」

だめだ、こんなことで店長に心配をかけてはいけない。

「ならいいけど。看板娘の葛原さんが元気ないなんて知ったら、葛原さん目当ての常連

さんがみんなすつ飛んで来ちゃうよ？」

「やだ、店長ったら。そんなわけないじゃないですかー」

「いや、気づいてないの葛原さんだから……」

店長が何故か苦笑してため息をつく。

まあ、目当てかどうかはさておき、確かによく話しかけてくれる常連さんは多い。だ
けど、そこから恋愛に発展するかという……そんなことはなかったりする。

でも、今回ののは今までと何か違う。

『妻に』なんて言われたのは、生まれて初めてだ。

もの凄い直球ストレート。それも豪速球だ。

そりゃ、凄くイケメンだったし、声も良くて、体型だってスラッとして背も高かった。
そんな素敵な人に妻になってくれ、なんて言われたら決して嫌な気はしない。

かといって結婚するかと問われたら答えはノーだ。

相手がどんな人も分からないし、まして会ったばかりなのに、結婚なんてできるわ
けがない。

それに……お坊さんでしょ。正直なところ、お寺や仏教やお坊さんについてなんてよ
く分からないし。イメージとして厳しい世界という印象もある。私には無理だよ、きつ
と……

「……うん。ちゃんとお断りしよう」

どうして支倉さんが私を気に入ってくれたか分からないけど、彼だって結婚するなら
しつかりと自分を理解してくれる人のほうがいいに決まってる。

「よし、仕事しよ……」

頬をぱちぱちと軽く叩き、気持ちを入れ替えた私は再び仕事に戻った。

そして迎えた、祖母の三回忌。

あんなに悩んでいたくせに、ここ一週間くらいはすっかり支倉さんのことを忘れてい
た。今日になってまた思い出し、にわかには緊張する。

会ったらちゃんと、お断りする——そう心に決めて、私は家族と一緒に家を出た。

うちの菩提寺であるこのお寺は、そこそこの歴史のある大きなお寺だ。大きな山門から
覗く本堂は立派で、そこに安置されている御本尊は秘仏となつている。

今日は休日ということもあり参拝客もちらほら見えた。

喪服に身を包んだ私達は控え室に通され、法要の始まる時間までお茶を飲んだりして
待つことになる。

「姉貴、なんかそわそわしてねえか？」

弟の佑が湯呑にお茶を注ぎながら、私に疑惑の視線を送る。ちなみにお茶はセルフ

サービスだ。

私は一瞬ビクツとするものなのか平常心を装った。

「し、してないし。久しぶりのお寺だから緊張してるだけ」

佑はふーん、と言ってお茶菓子に手をつけるが、表情はまだ訝しげだ。

「何か朝から様子がおかしいんだよなあ」

「気のせいよっ」

くっ、佑。何故こんな時はっかり鋭いんだ……

「頭の後ろ、髪ほつれてるぞ。トイレで直してきたら」

お茶菓子の袋をビリビリと破きながら、佑が私の後頭部を指さした。

「えっ、ほんと？」

頭に手を持っていく。今日は背中の中のまん中まであるストレートの髪をハーフアップにできたのだが、いつの間にか乱れていたようだ。

法要が始まるまでもう少し時間がある。私は、髪を直すために一人で控え室を出てお手洗いに向かった。

廊下を足早に進んでいると、後方から聞き覚えのある声に話しかけられて、肩が跳ねた。

「こんにちは」

すぐに誰なのか分かった。けれど、何故か金縛りにあったように体が固まってしまい、後ろを振り向けない。

「お久しぶりですね、花乃さん。あれから貴女のことを忘れた日は一日もありませんでしたが……貴女は？」

支倉さんが私に問いかける。

まさかこんなところで会っちゃうなんて……!! どうしよう……
ちゃんと断ると決意してきたものの、いざ彼を前にすると戸惑ってしまう。

だが、このまま逃げ出すわけにもいかないのです、私はおそるおそる背後を振り返った。すると、法衣に身を包んだ支倉さんが私に向かってニコリと微笑む。

その綺麗な笑みに怯みつつも、私は意を決して口を開いた。

「お、お久しぶりです……あの、支倉さん、私……貴方にお話が……」

「お手洗いを、お探ですか？」

あ、そうだった。うう……せっかく勇気を振り絞って話を振ったのに……

出鼻をくじかれた形になってしまいガックリするが、当初の目的を思い出した。今は彼とゆっくり話をしていない場合ではない。

「ええ、ちよつと、髪を直しに行こうと思って……」

「ああ、それでしたら私が直して差し上げますよ」

私の返事を聞いた支倉さんが、すつと後ろに回り込んだ。

「え、いいです。自分でやりますから」

「もうすぐ法要が始まります。結び直すより、ピンで留めたほうが早いですよ」

そう言うと、彼の指が慣れた手つきで私の髪に触れた。

うっ……なにこれ!! 心臓の跳ねっぷりがヤバイんですけど……!! いや、動揺してる場合じゃない。今言わないと、もうチャンスは無いかも……!!

私は覚悟を決めて、再び切り出した。

「あの、支倉さん、先日のお話なんですけど……」

「……貴女が言いたいことは、おおよそ見当がつかます」

静かに支倉さんが口を開いた。

支倉さんは私の髪からピンを抜くと、指で整えた髪に再びピンを挿す。

「差詰め、『先日のお話は無かったことに……』といったところでしょいか」

「え」

「申し訳ありませんが、その言葉は受け入れられませんね」

そう言って、彼の指が優しく私の髪を梳いてくる。くすぐったくて、こそばゆくて、何故か体が熱くなった。

「……どうしてですか」

動揺しつつも、私は必死で平静を装い彼に尋ねる。すると彼の気配がより近づき、私の耳のすぐ横で甘い低音が響いた。

「私は貴女と結婚したいので」

みっ、耳に息がかかった……!! わざとだ、絶対わざとやってるこの人……!!

彼の息がかかった耳に咄嗟に手を当て、私はなんとか声を出す。

「で、ですから! 急にそんなことを言われても困ります」

「それではせめて、私のことを知ってから判断していただけませんか?」

支倉さんの手が、髪から私の肩にするりと移動した。

「私を知っていたく機会なら、幾らでも作りますよ」

彼の手が触れている肩が、意思を持ったように熱を持つ。気持ちとは真逆の反応をする自分に動揺し、居たたまれなくなって思わずギュッと目を瞑った。

背後にいる彼のことを意識して、さつきから胸のドキドキが止まらない。

もう、この状況無理……!!

思いきって振り返ると、優しく微笑む支倉さんと視線がぶつかった。

「……もうすぐ法要が始まります。控え室にお戻りください」

そう言い残して、支倉さんは衣擦れの音と共に去っていった。

ド、ドキドキし過ぎて心臓が破裂するかと思った……

胸に手を当てて深呼吸を繰り返す。

あの人を相手にするとどうも調子が狂う……言いたいことが全然言えなかった。うるさい心臓をなんとか落ち着かせて控え室に戻ると、私の顔を見た佑に「なんで顔真っ赤なの？」と不思議そうに言われた。

うう……お祖母ちゃんごめんね。ほとんど読経が頭に入らなかつたよ……

あの後、すぐに三回忌の法要が始まったんだけど、読経の際、住職の加藤さんだけでなく、支倉さんまで現れたから、私は静かにお経を聞くどころじゃなくなってしまった。支倉さんはもう一人のお弟子さんと中央を向いているので目が合うことはなかつたんだけど……私は顔を上げることができなかった。

読経の後、お墓参りと卒塔婆の供養を行い、私達は会食にあたる、お斎のためにお寺の中の広間へ移動した。集まった三十人程の親族が、それぞれ用意された席に着く。最後に読経をあげてくれた住職の加藤さんが祭壇側の upper 座に着席する。

私は周囲を見回し、支倉さんがこの場にはいないことに心底ほっとした。

会食が始まってしばらく経つと、私の両親と叔父が住職と和氣藹々と談笑しているのが目に入った。

はっ、よく見たら叔父さん、お酒入ってない？

うわ……叔父さんお酒入ると、要らんお喋りを始めるんだよな……

なんて思っていたら、叔父とばかり目が合ってしまった。

「そういう花乃はまだ結婚しないのか」

ほらきた……お酒飲むといつもこれだよ……

「叔父さん。お酒飲む度にそれ聞くのやめてよ。こんな席で……」

ウンザリしながら、叔父を軽く睨みつける。だが、そんな苦情など気にもかけず、叔父は滔々と話し続けた。

「おばあちゃんの一週忌の時、付き合ってる相手がいるって言ってたじゃないか。その彼はどうした？」

ぐっ！……あの時も相当お酒入ってたくせに、そういうことはちゃんと覚えてるのね……

「残念ながら、とっくに別れました……!」

「なんだ別れたのか。お前ももうすぐ三十だろ？俺の会社の若いヤツ紹介してやろうか？」

「結構です」

私と叔父の会話にさりげなく耳を傾けていた父が、ここで口を開いた。

「花乃は結婚したくないのか？」

まさか父まで参戦してくるとは……

「そ、そういうわけじゃないけど、私は今の生活に満足してるから!」

「でもなあ……」

「ほんとに! 私のことより、佑のことを心配して」

「なんで俺!？」

「ほんやく先を弟に向けて、何とかその場をやり過ぐす。

「どうやら叔父さんは、会社に紹介したい若い子がいるみたいで、お酒が入ると毎回この流れになるのだ。本当に勘弁してもらいたい。」

「そんなこんなで、ぼちぼちお斎もお開きになりそうなので、私はすいているうちにと、トイレに立った。」

「しょうじん精進料理は美味しかったけど、いろいろあって疲れた。もう、早く帰りたい。」

「ハンカチで手を拭きながらトイレを出ると目の前に支倉さんがいて、驚きのあまり飛び退いた。彼は腕を組んで壁に凭れ、もた口元に笑みを浮かべている。」

「っ!! なっ!？」

「なんでここにっ!？」

「本日はお勤め御苦労様でした」

「驚きに目を丸くする私に構わず、支倉さんは壁から背を離すと丁寧に一礼した。彼は

先ほどまでの礼装ではなく、略装に着替えている。

「いえ、こちらこそ。ありがとうございます」

「何とか平静を装って私も礼をすると、支倉さんは優しく微笑んだ。

「弟さんがいらっしやるんですね。貴女とよく似ていらっしやる」

「そうですね? 自分ではよく分らないんですけど」

「……この間の薄いブルーのワンピースも素敵でしたが、喪服もとてもお似合いですね。このまま私の部屋にさらってしまいたいくらいです」

「……は……?」

「口元に不敵な笑みを浮かべた支倉さんがそんなことを言うもんだから、また顔に熱が集中してしまう。」

「変なこと言うのやめてください。支倉さんは、いつもそんなことを檀家の女性に言っているんですか?」

「おや、心外ですね。私がおんなことを言ったのは貴女が初めてですよ」

「支倉さんは本当に心外そうに少し肩を竦める。嘘ばかり……」

「それはどうでしょう。これまでも、女性とお付き合いされてきたでしょう?」

「絶対この人経験豊富に違いない、と思って鎌をかけてみた。」

「はい」

やっぱり。意外にあっさり認めたな。

「しかしながら、自分から望んでお付き合いました女性は一人もいません。これまでは全てあちらから来てくださったので」

なにそれ！ 超モテモテじゃないの!!

思わずため息が零れてしまう。

「だったらなおさら……」

「なので、自分から女性にアピールするのは実は初めてなのです。正直、加減がよく分かります。花乃さん。どうしたら私が本気だと分かっていますか？」

「……………」

そんなこと言われても分かんないし。

口をきゅつと真一文字に結んだまま、私は黙り込んだ。そんな私を支倉さんは少し困ったように覗き込んでくる。

「何も仰ってくれないのですか？」

「わ、分からないんですよ！ 私だってこんな状況、初めてですから」

私の答えに対して、支倉さんは口元に手を当てて何やら考える仕草をした。そしてチラリと私に視線を向ける。

「貴女が許可してくれるなら」

「なんです？」

「抱き締めてもいいですか？」

——はっ!?

突拍子もない申し出に思わず目を丸くした。でもすぐ彼の要求を理解し体が熱くなってくる。

「……そんなのっ！ 却下しますっ!!」

私はぶんぶんと首を横に振りながら彼を睨みつけた。だけど支倉さんは表情を変えない。

「じゃあキスは？」

「あっ、ありません!!」

間髪を容れず即答した。

私の返事にくっくっくっ、と肩を震わせて笑う支倉さん。

「金城鉄壁とはまさにこのこと。花乃さんを口説き落とすのは一筋縄ではいかなそうですね」

そう言いながらも、彼の態度からは余裕が感じられる。

私がいける理由をつけて断っても、きつと支倉さんのペースに持っていかれるに違いない。そんな気がする……。やだ、逃げたい。もう帰ってもいいかな。

「すみません、私そろそろ戻ります」
支倉さんから目を逸らし、お斎の会場に戻ろうと踵を返したところで、いきなり腕を掴まれた。

「え！ なにす……」

「事前に許しを請うと断られるので、いささか強引な手段に変更致します」

耳元で囁かれたと思つたら、あつという間に私の体は支倉さんの腕に包まれていた。

「っ!!」

——どっ、どうしよう！ 私、抱き締められて……！

この状況を自覚した瞬間、私の体は石のように固まってしまった。

「棚経の日、よろけた貴女を支えた時もありましたが、細いですね」

そう囁きながら、彼の掌が私の背中を優しく撫でる。壊れ物を扱うような手つきに、身を任せそうになってしまった。しかし、今はそれどころではない。

「はっ……離してください！」

私は彼の腕から逃れようと身を振る。

「貴女に、私の胸の音が伝わりませんか？」

そう問うた後、彼は私の頭を自分の胸に優しく押しつけた。私は一瞬抵抗を忘れて支倉さんの胸元に耳を当てて。

……あれ、結構ドキドキしてる？

思わず、支倉さんの顔を見上げたら、彼と視線がぶつかった。

「……本当に、なんて可愛らしい……」

「え」

「このまま、貴女を私のものにしてしまえたら……」

支倉さんが蕩けるような眼差しで私を見つめながら、絞り出すように呟いた。

そのとんでもない呟きに一瞬固まってしまった私は、すぐに我に返る。

「なっ、何言ってるんですか!! お、お坊さんがそんなこと言っているんですか!？」

「僧侶だって人間です。少なくとも、うちの宗派で恋愛は禁忌ではありません。私の両親も恋愛結婚です」

しれつともつともらしく言われ、こっちは何も言い返せない。その隙に支倉さんはさらに私を包み込む腕に力を込めた。

——なんかこれ、ヤバくない？ は、早く離れなければ……!!

「は、離してください！」

身の危険を感じ、腕に力を入れて支倉さんを押しやるも、支倉さんはびくともしない。「花乃さん。私との結婚を真剣に考えてくださいませんか」

「もう、からかうのは止めてください」

こんな超イケメンで今まで女性に苦勞したことなどなさそうな人に、平穩な私の日常を引つ掻き回されるのはご免蒙りたい。

「私は本気です」

「いつ、嫌です!!」

そう言った瞬間、私を抱く支倉さんの腕の力が緩む。

気がついたら、私は両手で支倉さんを強く突き飛ばしていた。

「……もうっ、二度と私の前に現れないでください」

驚いたように立ち尽くす支倉さんに、これ以上ないくらいはつきり告げる。

そのまま私は踵を返し、振り返ることなくお斎会場に戻った。そして、引つたくるように自分のバッグを手にする。

「私、歩いて帰るからっ」

突然戻ってきた私の劍幕に驚き、キョトンとしている家族へそう宣言し、私は逃げるようにお寺を後にしたのだった。

三 花乃、讓歩する

——はあ……

もうすぐ鬼のように忙しいランチタイムが始まる。呑気にため息なんかついている場合ではないと分かっているのだが、どうもここ最近、私の気分は下降する一方だ。

「葛原さん……最近ため息が多いけど、何か悩みごとでもあるの?」

そんな私を近くにいた店長が心配してくれる。

「……店長……人間誰しも失敗することありますよね……」

私は遠くを見つめながら、店長に同意を求めた。

いきなりそんなことを言われた店長は、ちよつと困惑した顔をしている。

「そりゃあ、ねえ。……もしかして葛原さん何か失敗でもしたの?」

「……まあ、ちよつと……」

コーヒーカップを拭きながら、また一つため息を落とす。

あれから一週間で過ぎた。

支倉さんに突然抱き締められ再び求婚された私は、動揺した勢いでかなり酷いことを言ってしまった。

でも時間と共に、少しずつ冷静さが戻ってくると、さすがにあれは言い過ぎたかもしれないと自己嫌悪に陥る。

支倉さんにも、確かに行きすぎたところがあったと思う。それでも、あんな風に頭か

ら拒絶しなくてもよかったのではないか……

そう思うとキリキリと胃が痛んでくる。

……いやいや、別に好きでもない人にどう思われたっていいじゃない。何度もそう思うようにしても、やっぱりどこか気分が晴れないのだ。

あんな捨て台詞、言わなきゃよかった……

「葛原さん……本当に大丈夫？」

店長がまた私を見て心配そうに呟いた。

「すみません……もうすぐ上がりなんです、今日はさっさと帰って休みます」

「よく休んで、早くいつもの葛原さんに戻ってよ？」

「……はい」

ほんと、戻りたいです……

勤務を終えた私は、のんびりと商店街を散歩しながら帰ることにした。

太陽が沈みつつある夕方六時。昼間の暑さが少しおさまり、吹く風もどことなく心地いい。

私は落ち込んだ気分を変えようと、お気に入りの洋菓子店のプリンを買って帰ることにした。その店のプリンは今流行りのとろっとしたクリーミーなプリンではなく、昔ながらの弾力のあるプリンだ。甘さも控えめで、下の方にあるカラメルソースと一緒に食

べると甘さとはる苦さとの加減が絶妙の美味しさなのだ。

そのプリンを無事にゲットして、再び帰路につく。

しかし支倉さんに対する罪悪感と、このいまいちすつきりしない気持ちは一体どこから来るのか。ちょっと考えたくらいでは、その答えは見つからなかった。

ま、いいか……考えても分からないことは仕方がない。今日はこれ食べて早く寝よつと。

気持ちは切り替えて、やや気分が浮上した私はいつもと変わらない調子で自宅のドアを開けた。

「ただいま……」

家のドアを開けて玄関に入った私は、そこにあるはずのないものを見つけて立ち止まった。狭い玄関に綺麗に揃えて置かれているのは、まさかの草履——

まさか……まさか、まさか……！

「あつ、花乃！ 支倉さんがいらしてるわよ」

廊下の向こうから母がパタパタとスリッパを鳴らしてやってきた。

やっぱり！！

「……な、なんで？ なんでうちにいるの……？」

私は玄関に立ち尽くしたまま、やっとのことで喉から声を絞り出した。

「あんたが三回忌の時にお寺に落としたハンカチをわざわざ届けてくださったのよ。ほら、早く客間に行ってお礼を言ってきたさい！ 私は、スパーのタイムセールに行ってくるから、後は頼んだわよ！」

母は私にハンカチを手渡すと、足早に家を飛び出していった。

「……………嘘でしょ……………」

私は玄関の上がりかまち櫃に手をつけて、がくりと項垂くみただれる。

なにこの展開。

確かに言いすぎってしまったことを謝りたい、という気持ちはあった。だからって、どうしてこの人はいきなり家まで訪ねてくるの？ ほんとこの人の行動は私の想像の斜め上をいくものばかり。

とはいえ、こうして忙しい中、忘れ物を届けに来てくれた相手を、無視するわけにもいかない。

私は、大きく深呼吸をしてから客間に向かった。一声かけて襖ふすまを開けると、棚経たなきょうの時間と同じ出で立ちいたで背筋をぴん、と伸ばし正座をしている支倉さんと目が合った。

「……………花乃さん」

私を見るや否いなや目を見開いた支倉さんは、ちゃぶ台から少し横にずれて畳に手をつき、私に向かって頭を下げた。

「え、支倉さん……………」

支倉さんのいきなりの行動に、私は面食らってしまう。

「先日は大変ご無礼いたしました。ご気分を害されたのであれば、心よりお詫びいたします。申し訳ありませんでした」

抱き締められた時のことをはつきり思い出してしまい、心拍数が上がる。それをなんとか落ち着かせて、私も畳に正座した。

買い物袋を脇に置いて、頭を下げる支倉さんを見つめる。

これまでのことから、少なからず支倉さんに対しては思うところがあった。それなのに、こうして真摯まじしに頭を下げられると、なんとなく許すような気持ちが湧き上がってくる。

我ながらなんとチョロい女だろうと、自分がかっかりする。でもこの前のことがずっと引っかかってモヤモヤしていたのも事実だ。だったらこの機会を利用して謝ってしまえばいい。そうすればきつと気持ちもすっきりするはずだ。

私は一度深呼吸をしてから、支倉さんに向かって静かに口を開いた。

「支倉さん。頭を上げてください。……………あの日は私も、つい勢いで失礼なことを言ってしまったので、謝りたいと思っていました。私の方こそ、酷ひどいことを言っして申し訳ありませんでした。でも——」

支倉さんが頭を上げて、私をじっと見つめてくる。

「でも?」

「やっぱり、貴方と結婚はできません」

「……何故、とお聞きしても?」

「まだ知り合って間もないのに、いきなり妻にとって言われても現実味がありません。それに、お寺の事情はよく分かりませんが、結婚するなら私みたいに何にも知らない女より、もっと支倉さんに相応しい教養を持った方のほうがいいのではないですか? だから……」

「私に相応しい女性、か……」

私の話を黙って聞いていた支倉さんが、窓の外に視線を向けて呟いた。

「私の妻は、もう花乃さんしか考えられません。なので、貴女と結婚できないのであれば、私は生涯独身を貫くだけです」

至極真面目な顔をして、再び視線を戻した支倉さんが言った。

「え? ちょっと、何言ってるんですか、そんな大袈裟な」

「大袈裟ではありません。それほど、私の中で貴女の存在は特別なのです。花乃さん、何度でも言います。私の妻になってください」

支倉さんの言葉に、私はボカんと口を開けたまま絶句した。

どうしよう……私が言ったことが通じない……というか、私の主張と彼の主張が根本的に食い違っているような気がしてならないんだけど……

そうなるかどうかにならぬに私が今の気持ちを彼に伝えたところで、結局堂々巡りになっちゃうんじゃないかな……

すると支倉さんが、困惑する私から視線を逸らして苦笑した。

「ですが、出会ってすぐに求婚というのは、確かに性急すぎました。花乃さんが混乱し、私を信じられないのももっともかと思えます。その点は深く反省しております」

「……はい」

そう、そうなんですすよ! 一瞬で心の中の霧が晴れたような気持ちになって、私はつい緩んだ顔で支倉さんを見る。

そんな私を見て、支倉さんがニコツと微笑んだ。

「それでひとつ提案があるのですが……とりあえず私という人間を知っていただけませんか?」

「え……」

「つまり、結婚は考えずに、まずは私とお付き合いから始めてみるのはいかがでしょうか」

「はっ!?!」

ここへきて、また振り出しに戻った！
 ……でもちよつと待てよ。これまでみたいにいきなり「結婚してくれ」って言われただけ、状況は変化しているのかもしれない。

私は改めて、目の前にいる支倉という男性について考えてみる。
 外見は高身長に、端正な顔立ち。物腰も柔らかく客観的に見ればとても印象のいい人だ。

しかし内面はやや強引で、人の話をあまり聞かないといった面もある。そこはかなり厄介だ。

だけど私に何度も拒絶されているというのに、こうやって新たな提案をしてまで関係を続けようとするのは、それだけ私への思いが強いということではないか。

正直なところ何故彼が私にそこまでの感情を持っているのかさっぱり分からない。ただ、ちよつと気にはなってる。彼が私の何を見てこう言っているのか……

彼の提案について考えている間、支倉さんは黙って私の返事を待っていた。私は伏せていた顔を上げると、心を決めて支倉さんと向かい合う。

「……本当に、結婚のことは考えなくてもいいんですか？」
 そう確認すると、彼の綺麗な顔が優しげに綻んだ。

「はい」

「分かりました。では……お付き合いからで、お、お願いします」

おどおどしながら提案を承諾した私に、支倉さんは嬉しげに頬を緩ませ、満面の笑みを浮かべる。

「ありがとうございます。これで断られたらもう望みはないと思っていたので、安堵しました」

「そんな、大袈裟です」

「いえ、本当に。これ以上貴女に嫌われるのは辛かったです」

どこかリラックスした感じの支倉さんの笑顔に、つい見惚れてしまう。スツと上がった眉に、高い鼻と切れ長の目。薄い唇に綺麗な歯並び……

この人、本当に綺麗な顔をしてるな。

そんなことを考えていたら、突然、今この家に二人きりだということを思い出す。その途端、妙に支倉さんを意識してしまい、胸がドキドキしてきた。

「花乃さん？ どうかされましたか」

急に落ち着きがなくなった私を不思議に思ったのか、支倉さんがそう尋ねてくる。

「な、なんでもない、です……」

この胸のドキドキを悟られないよう、私は必死に平静を装った。その時、私の視線が買ってきたプリンを袋を握る。

「あ……、あの、支倉さん。プリンはお好きですか？」

「プリンですか」

「ええ。このプリン、凄く美味しいんです。久しぶりに食べたくなくて、帰りに買ってきたんですけど」

プリン……支倉さんも食べるかな……

私は、側に置いていたプリンの袋を膝の上ののせた。

「花乃さんは、プリンがお好きなんですか？」

「はい。プリンもですけど、寒天とか羊羹とか、くずきりとか。ツルツとした食感のものが好きなんです」

「そういえば、棚経たななきょうの時、お土産みやげにいただいた水羊羹みずようかんもとても美味しかったです」

支倉さんにはにっこりと微笑んだ。そんな彼の笑顔を見ると、少し胸が切なくなる。

付き合うことになったものの、私はこれまで、随分支倉さんに冷たく当たっていた。

それなのに、どうしてこの人は、こんな優しい顔で私に微笑みかけてくれるんだろう。

心が広いのか、よっぽど我慢強いのか……

そんなことを思いながら、支倉さんの顔を窺うかがう。

「……プリン、食べますか？」

私が尋ねると、支倉さんは綺麗な目を見開き、何故か驚いたような顔をした。

「よろしいのですか？」

「あつ、もしかして食べてはいけない、とか……」

「いえ。修行中は制限しますが、今はそういうことはないのです大丈夫です。ぜひ、頂きたいです」

支倉さんは今まで見たことがないくらい、嬉しそうに笑った。

その笑顔に再び目を奪われてしまった私は、慌てて立ち上がる。

「じゃあ、ちょっと待っていてください」

私は急いでキッチンに向かうと、新しいお茶とおしほりを用意して客間に戻った。そして、袋から出したプリンと一緒に、支倉さんの前に置く。

「どうぞ」

「頂きます」

支倉さんは、綺麗な所作でプリンを食べ始める。

「……確かに、滑なめらかで口当たりがいいですね。卵の味も濃くて……とても美味しいです」

そう言って、彼は優しく微笑んだ。

「よかったです。私もこの味が、凄く好きなんです」

私もプリンを一口食べる。そうしながら、私の意識はつい支倉さんの手元に行つてし

まう。

「やっぱり、綺麗な手……」

「そういえば、初めて会った棚経の日も、この人の手に見惚れてたんだよね。あの手で髪を撫でられたり、抱き締められたりしたのか……」

「そんなことを思い出してしまい、恥ずかしさに支倉さんを直視できなくなる。」

「髪がちに黙々とプリンを食べていたら、先にプリンを食べ終えた支倉さんが話しかけてきた。」

「花乃さん」

「は、はい」

「お付き合いすることになりましたし、よかつたら二人でどこか出かけませんか？」
改まってデートに誘われて、プリンを食べていた私の手が止まる。

「あの、もうですか？」

「はい。貴女に私のことを知っていたくには、早いほうがいいかと」

「支倉さんは柔らかな口調で、きっぱりと言う。」

「——ど、どうしよ……。そりゃ、彼の言うことはもつともなんだけど、いきなり二人で出かけて、一体何を話せばいいわけ……」

「なんてことをめまぐるしく考える私に、笑みを浮かべた支倉さんが提案する。」

「そうですね、花乃さんのお休みの日に二、三時間くらい、お付き合いいただけませんか？ 美味しいあんみつを食べに行きましょう」

「……あんみつ」

「思わずぱつと顔を上げて呟いた。目が合うと、にっこりと微笑まれる。」

「あんみつか……。しばらく食べてないな。うう、私、あんこものにも弱いよね。しかも支倉さんのお薦めなんて凄く気になる……。……！」

「こんな簡単に食べ物に釣られるなんて、我ながら単純すぎないか？ という気がしないでもない。」

「支倉さん、私の弱いところを見事につけてきた感じ。」

「わ、分かりました」

「結局、欲求に負けてデートを承諾してしまった。」

「でも、嫌な感じはしなかった。」

「だってこれまでのような性急で強引な彼ではなく、あくまでも私のペースに合わせて、歩調を合わせてくれたのが何となく分かったから。」

「私も拒絶ばかりしてないで、ちゃんと向き合って彼のことを知ろう。そう思えたので、首を縦に振った。」

「「ありがとうございます、花乃さん、恐縮ですが連絡先を教えてくださいたくことはできま